

「ひとの幸せを願う気持ちを行動にかえてみたら、奇跡みたいにステキなことが起きる」帯の言葉に惹かれて、本を手に取りました。ステキなことって何だろう。奇跡って本当にあるのかな。そんな疑問を持ちながら、読み進めていきました。

『希望のひとつしずく』は、ライアン、アーネスト、リジーが、奇跡を起こす物語です。三人は、伝説の井戸を使い、人々の願いを叶えていきます。その中で私は、ライアンとアーネストのことが印象に残りました。

「うれしいのは友達がいるってこと。」

アーネストのこの言葉を聞いて、友達存在が「当たり前」ではないことに、改めて気づかされました。今までは、友達と過ごす時間が「楽しい」と強く感じているだけでした。しかし、友達に対するありがたみを感じる機会がありました。それは、今年の五月に行われた野外活動です。私は班長を務めていて、まとめる場面が多くありました。特にカレー作りでは、次に何をすればいいのかわからなくなってしまう、呼びかけをすることができませんでした。とても不安になったし、焦ってしまいました。どうすればいいか聞くと、「私は火加減を調節するから、具材の様子を確認しておいて。」と友達が答えてくれました。私はこの言葉にとっても救われました。

自分のやる事が明確になったことで、気持ちも軽くなりました。このように、質問をすれば優しく答えてくれる友達、困っていたら助けてくれる友達、会話をして盛り上がってくれる友達など、さまざまな人が私の周りにいることに気づかされました。そして、とても恵まれているということを感じました。この本の中でも、願

を叶えるために協力していたり、何気ない会話をしていたりする場面がありました。友達という、かけがえのない存在を、今まで以上に大切にしていきたいと思えます。

「ひとりの力で世界はよくできないけど、自分ができることをして願えばいい。」

これは、井戸の伝説や奇跡を信じていなかった、ライアンの言葉です。最初のほうは、私もまだ信じきれず、疑うこともありましたが徐々に叶っていく様子を見ると、「本当に奇跡は起こせる」と思うようになりました。きっとライアンもそうなのだと思います。また、世界のために「自分ができること」を考えるのは難しいと思います。

しかし、本のタイトルのように、『奇跡のひとつしずく』は、どこにもあるもので、身の回りの小さなことから、「自分ができること」をすれば、世界が少しずつ希望であふれていくのではないかと考えるようになりました。少し壮大すぎたかもしれないけれど、「そうならばいいな」と心から願います。「まだ中学生だから」と自分の行動範囲を決めつけるような、「枠」にとらわれないことも大切だと感じます。一人一人が小さなことでいいから、人の幸せを願う気持ちを行動に変えてみたら、「幸せの連鎖」が生まれるのではないかと、ライアンの言葉を聞いて強く思うようになりました。

私は今まで、ライアンのような現実主義的な考え方が多かったと思います。しかし、アーネストのように理想を追い求め、ポジティブ思考をもち続ける姿に共感し、取り入れていきたいと思いました。考えを曲げるのは、今ままであまり好きではありませんでしたが、二人の姿を見て変化しました。そして、考えを押し通すだけではなく、相手の意見をしつかりと聞き、理解しようとするのがとても大切だと感じました。これからの学校生活で、友達と考えがぶつかることもあると思います。そのようなときこそ、アーネストとライアンのように、互いの意見をしっかりと聞き、よりよいクラスにしてい

たいです。友達の貴重さや大切さを改めて見つめ直し、相手のことを思いやる気持ちを大切にすることで、よりよい関係が築けると信じています。

奇跡やステキなこと。この本を読み終わったとき、日常で起きていることの全てがそうなのではないかと思いました。食事ができて何より命があること。まだまだたくさんあるけれど、これらのことが当たり前ではなく、恵まれていることに気づかされました。この幸せをかみしめ、さらに「幸せの連鎖」を起こすために私ができる小さなこと。それは、感謝を伝えることです。食事のときに「いただきます」「ごちそうさまでした」と言うことや、お世話になった人に「ありがとう」と伝えることです。今挙げたことは、誰にでもできると思います。感謝されて、心が温かくなったことは誰しも経験したことがあるでしょう。だから、積極的に感謝の気持ちを伝えていきたいと思います。これが、いちばん早く「幸せの連鎖」を起こす方法だと、心から信じます。 6・9